

# 総合的コミュニケーション能力育成を目標とした 卒業プロジェクト授業実践

眞島 淳

## 1. はじめに

「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として2006年に経済産業省により「社会人基礎力」が提唱され、2012年及び2014年の中央教育審議会答申において、急速なグローバル化や少子高齢化がもたらす人口構造の変化など、我が国の社会をとりまく環境が大きく変化する中で、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材を育成するために、従来のような知識の伝達・注入を中心とした受動的な学修ではなく、学生が主体的に問題を発見し、解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換の必要性が提唱された。そして、有効なアクティブ・ラーニングの方法として、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が挙げられ、本学でも、共通教育科目のキャリア教育分野において「プロジェクト学習基礎」などの科目が設置されている。

本稿では、学生アンケート結果や実践を通して得られた知見をもとに、2022年度筆者が担当した卒業研究科目「卒業プロジェクトⅠ・Ⅱ」における授業実践を振り返り、総合的コミュニケーション能力育成を目標とした授業デザインについて省察を行う。

## 2. 卒業プロジェクトの概要

本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースでは4年次に「卒業プロジェクトⅠ・Ⅱ」または「卒業論文指導」のいずれかを選択し、必ず履修登録することとなっている。どちらも4年間の学修の集大成と位置付けられるが、卒業論文が個人での論文執筆であるのに対し、卒業プロジェクトはグループで特定のテーマに基づいた課題解決型プロジェクトを実践する。

### 2.1 教育目標

4年間の学修の集大成と位置付けられる卒業プロジェクトであるが、その教育目標を設定する上で、学部の学位授与方針であるディプロマ・ポリシー（以下「DP」）に掲げられた（1）実践的で高度な外国語運用能力、（2）他者と協調、協働できるコミュニケーション力、（3）言語の基礎にある多様な社会、文化、歴史、政治、経済などに関する幅広い知識や教養の習得の三点が核となることはいままでのない。

さらに、卒業後に社会人となり、21世紀のグローバル社会を生きていく学生に必要な能力を考える上で、2013年に公益財団法人国際文化フォーラムから発行された「外国語学習のめやす

高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」(以下「めやす」)を参考とした。めやすでは、その学習目標として、総合的コミュニケーション能力の獲得が掲げられている。ここで注目に値するのは、この総合的コミュニケーション能力が、一般的にコミュニケーション能力を構成する言語領域と文化領域だけでなく、グローバル社会領域を構成要素として掲げている点である。グローバル社会領域ではグローバル社会が必要とする21世紀型スキルなどを身につけることを必須としており、高度思考、協働、情報活用の3つのスキルが挙げられ、これらのスキルは2006年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」とも共通する点が多い。高度思考、情報活用は本学部のDPに掲げられていないものの、学生が21世紀のグローバル社会で生きていく上で必要不可欠であると考えられる。そのため、筆者が2022年度に担当した卒業プロジェクトでは、本学部のDPに掲げられた三点に高度思考、情報活用のスキルを加えた総合的コミュニケーション能力の育成を教育目標とした。

## 2.2 対象者

本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コース4年次生を対象とし、履修者は計13名(学生A～M;男子4名、女子9名)であった。

## 2.3 卒業プロジェクトのテーマ

2020年に始まった新型コロナウイルス感染拡大は、観光産業にも大きな打撃をもたらした。そのため、国や多くの地方自治体が観光産業の再生とポストコロナを見据えた新たな観光モデル創出のため、様々な取り組みを行っている。この状況に鑑みて、筆者が2022年度に担当した卒業プロジェクトでは、観光をテーマとし、大学が位置する神戸のポストコロナを見据えたツーリズム振興に寄与することを目標とした課題解決型プロジェクトに取り組むことにした。公益社団法人ひょうご観光本部が2020年2月に発表した「ひょうごツーリズム戦略 2020年～2022年度」によると、兵庫観光の課題として、国内旅行客は隣接県が主要マーケットであり、県民旅行(宿泊)比率が高いことが挙げられている。また、インバウンドについては、兵庫は変化にとんだ自然とまちが近接しているにもかかわらず、訪日客の滞在時間が短く、宿泊日数にもつながっていない点が挙げられている。一方、神戸観光局が重点方針として掲げる「国内旅行戦略」及び「インバウンド戦略」においても、滞在型国際観光都市の実現が共通で掲げられていることから、卒業プロジェクトの課題として神戸を周遊する1泊2日の旅行プラン(コンテンツ)の開発に取り組むこととした。

## 2.4 授業計画

2022年度一年間の授業計画を表1に示す。学生が(1)日本、兵庫、神戸における観光の現状と課題の理解、(2)神戸観光の課題と卒業プロジェクトの目的の明確化、(3)作成する旅行プランのターゲットとグループアクションプランの策定、(4)アクションプランに基づいた調査実施と調査結果分析、(5)旅行プラン作成というように、段階を追って学生の主体性が増していくようにデザインし、ステップを踏みながらプロジェクトを実践できるようにした。

表 1. 2022 年度授業計画

前	回	内容	後	回	内容
期 I	1	オリエンテーション	期 II	1	オリエンテーション、グループ作業進捗確認
	2-4	岩崎邦彦 (2019) の「地域引力を生み出す観光ブランドの教科書」を題材としたプレゼンテーション、討論		2-3	グループワーク (中間発表準備)
	5	テーマ別観光に関するプレゼンテーション、討論		4	中間発表
	6	神戸の観光資源に関する調べ学習		5-6	グループワーク (観光プラン修正)
	7	国土交通省観光庁、兵庫県の観光消費動向・動態調査資料及び神戸観光局の観光戦略に関する講義、グループ分け		7-8	高校での交流授業参加 <sup>1</sup>
	8-10	グループワーク (ターゲット設定、アクションプラン策定)		9-10	最終成果発表会リハーサル
	11	外部講演 (神戸観光局職員) 「神戸観光の現状と課題」		11-12	最終成果発表会
	12-13	グループワーク (ターゲット設定、アクションプラン策定)		13-15	グループワーク (最終成果物である旅行プラン冊子の作成)
	14	前期期末発表			
	15	前期まとめ			

## 2.5 評価方法

卒業プロジェクトは定期試験を行わず、表 2 に示す項目で評価を行った。プレゼンテーションについては (1) 内容、(2) 構成、(3) 視覚情報・資料、(4) 発表姿勢 (態度・話し方)、(5) 発表時間、(6) チームワーク、(7) 質問への応答を四段階 (4: とても良い、3: 良い、2: 普通、1: もう少し) で評価し、簡単なコメントを記入する評価シートを用いて教員・同級生による評価とフィードバックを行った。また、グループワークを行う際は、(1) 先週からの 1 週間で行った作業及びその分担、(2) 本日の授業で話し合ったこと、(3) 来週までの 1 週間に行う作業予定とその分担を記入する授業日誌をグループで記入するようにし、教員によるフィードバックを行った。

表 2. 評価方法

		評価項目	%	内容
前 期 I	1	プレゼンテーション	20	(1) 指定図書輪読プレゼンテーション (15 分、15%) (2) テーマ別観光に関するプレゼンテーション (5 分、5%)
	2	期末発表	20	①自分たちが作成する旅行プランのターゲットとその設定理由、②旅行プラン作成のために行う調査のアクションプランに関するプレゼンテーション (15 分)

	3	期末レポート	30	①研究動機、②先行研究、③暫定旅行プラン、④調査方法と調査計画を記述したレポート
	4	授業への参加状況	30	(1) プレゼンテーション評価表 (3% × 3回 = 9%) (2) 授業日誌 (2% × 6回 = 12%) (3) 外部講演感想文 (4%) (4) 観光資源に関するワークシート (5%)
後 期 Ⅱ	1	中間発表	10	作成した旅行プランの①作成の動機・背景、②先行研究、③設定したターゲット、④調査方法、⑤調査結果とその分析・考察、⑥旅行プラン案、⑦まとめと課題について整理した中間プレゼンテーション (国内・インバウンド各 5% × 2 = 10%)
	2	リハーサル発表	10	最終発表会リハーサルでのプレゼンテーション (国内・インバウンド各 5% × 2 = 10%)
	3	最終成果発表	20	旅行プランに関するプレゼンテーション (国内・インバウンド各 10% × 2 = 20%)
	4	最終成果物	20	グループで作成した旅行プラン冊子 (国内・インバウンド各 10% × 2 = 20%)
	5	授業への参加状況	40	(1) プレゼンテーション評価表 (3% × 4回 = 12%) (2) 授業日誌及び交流授業感想文 (2% × 9回 = 18%) (3) グループワーク自己・相互評価表 (10%)

最終成果物である旅行プランについては、各グループ国内旅行者向けとインバウンド旅行者向け<sup>2</sup>の2つを作成することとし、公益社団法人ひょうごツーリズム協会が2019年まで実施していた「学生を対象とした観光魅力づくりコンテスト」の審査基準、及び神戸観光局が2022年に募集を行った「With コロナ時代からの滞在型観光の促進事業」の評価視点を参考に表3に示す評価基準を設定した。

表3. 旅行プラン評価基準

視点		評点
新規性 独自性 適格性	・観光資源の発掘を含め、学生の目線で観光資源について新しい切り口で紹介を行っているか (先進性、真新しさ) ・新型コロナウイルス感染症拡大防止の視点が考慮されているか	20
効果	・With コロナ時代に対応し、After コロナ時代も見越して、国内外からの観光客に足を運ばせる「観光ブランド」づくりにつながるものとなっているか ・神戸の滞在型観光に効果が見込まれるものとなっているか ・広く市内や神戸観光圏の地域経済の活性化に役立つものとなっているか ・その他、市民・地域にメリットがあるか	30

分析	・課題やターゲットが明確になっているか ・具体的でわかりやすく、伝わりやすい内容となっているか	30
実現可能性	提案内容が実現可能なものか（費用の概算、一人あたりの参加費を設定し実現可能なプランになっているか）	10
ホスピタリティ	観光客をもてなす内容となっているか	10

### 3. 実践結果と省察

この章では学生アンケート調査の結果と筆者の観察をもとに、教育目標として掲げた総合的コミュニケーション能力について、その構成要素である(1)外国語運用能力、(2)21世紀型スキル(協働力、高度思考力、情報活用力)、(3)社会文化知識の三つの観点から分析を行い、授業実践結果と改善点について省察を行う。アンケートは自由記述部分を除いて、5段階評価(5は「強くそう思う」、1は「全くそう思わない」)を用いて実施した。アンケート調査の結果は、今後の授業設計・改善だけでなく実践研究としての公表など学術的研究を目的とした用途にも使用されることを事前に説明し、了承を得ている。

#### 3.1 実践的で高度な外国語運用能力

本稿の卒業プロジェクト科目は高度な中国語運用能力を実践する場であるべきだが、表4のアンケート結果が示すように、卒業プロジェクトを通して中国語運用能力が向上したと考える学生は少数であった。中国語を使用する機会は主に、グループワークでの中国語資料収集、中国語アンケートの作成・収集、中国語によるインタビューに限られ、授業では最終成果発表会においてインバウンドを対象にした旅行プランのまとめ部分のみ中国語で発表するにとどまった。

卒業プロジェクト終了まで中国語学習を意識的に継続したと答えた学生は13名中6名(46.2%)にとどまった。4年次、特に後期は卒業に必要な単位を既に修得済みの学生が多いことから、プロジェクト最後まで学生が中国語学習を意識的に継続する仕組みの構築が必要だといえる。

表4. 中国語運用に関して

項目	平均	5	4	3	2	1
卒業プロジェクトを通して、中国語運用能力が向上した。	2.69	2 (15.4%)	0 (0.0%)	4 (30.8%)	6 (46.2%)	1 (7.7%)

2022年10月よりコロナウイルス感染拡大防止のための水際対策も緩和されてきており、中国語圏の中でも特に台湾、香港など繁体字圏からの訪日客の回復が著しい。現在、神戸観光局が台湾をメインターゲットの一つとしてプロモーションを実施しているため、2023年度は学生と同年代である台湾の大学生をターゲットとし、中国語で最終成果物の作成及びプレゼンテーションを行うこととし、中国語運用面における明確なゴールを提示することにしたい。

その他、プロジェクトを行うグループ決定後、台湾の大学生をアドバイザーとして各グループに

配置し、中国語によるグループワークのチェックを定期的にオンラインで行うシステムを構築し、生の中国語に触れ、中国語学習のモチベーションが維持できるようにしたい。

## 3.2 21世紀型スキル

### 3.2.1 協働力

めやすにおいて協働力は「自分と違う考え方、価値観、感性を持つ多様な他者と協力して作業できる力」を指すとしている（當作、中野 2013:28）。一年間のプロジェクトを終えて、学生はその意義についてどのように感じたのかについて、表5で示すアンケート結果をもとに省察を行いたい。

表 5. 協働力の向上について

	項目	平均	5	4	3	2	1
1	自身のコミュニケーション能力を高めてくれた。	4.23	5 (38.5%)	6 (46.2%)	2 (15.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
2	責任感が向上した。	4.54	8 (61.5%)	4 (30.8%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
3	目標や進度（スケジュール）の管理能力が向上した。	4.38	5 (38.5%)	8 (61.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4	目標を設定し、行動して任務を遂行する能力が向上した。	4.38	6 (46.2%)	6 (46.2%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5	他人の観点や価値観に対してどのように耳を傾け、尊重すべきかを学んだ。	4.85	11 (84.6%)	2 (15.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
6	自分の考え、観点、自信が持つ知識、能力、情報などを他人が理解できるようにどのように伝え、共有すればよいかを学んだ。	4.46	6 (46.2%)	7 (53.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
7	自身の協調性（チームワーク）向上に役立った。	4.54	8 (61.5%)	4 (30.8%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
8	自身のリーダーシップ向上に役立った。	4.23	7 (53.8%)	2 (15.4%)	4 (30.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	平均	4.45					

まず、DPでも取り上げられている協働力の基礎となるコミュニケーション能力について向上したととらえた学生が多い（表5項目1）。

表5の項目2-4はめやすで示される協働力の「信頼性」に関連する部分であり、グループワークを通して、学生は目標設定、スケジュール管理、任務遂行、責任感などの各方面において協働力が向上したととらえている。

表5の項目5-8から、学生が今回のグループワークは、めやすで示される協働力の「ディスカッション能力」の向上にもつながったととらえていることがわかる。表6の感想文（抜粋）からも、学生がグループワークの中で意見の不一致などにぶつかりながらも、試行錯誤をして、お互いの意見の落としどころを探し、プロジェクトを完成させたことがうかがえる。また、協調性だけでなく、リーダーシップの向上にも役立ったと感じていることがわかる。

表6. 協働力に関する感想

学生	内容
E	このプロジェクトはグループで作成したので、グループならではの難しさであったり、協力しあうことの大切さを学びました。意見の食い違いなどもありスムーズに進まないことがあったが、お互いの意見を尊重し合って何とかプロジェクトを作成し終えることができました。
G	メンバーの意見を聞いて話し合いまでは出来たのですが、そこから観光プランの決定までメンバーの意見が一致しなかったり、メンバー全員の意見を取り入れすぎて観光プランの目的が分からなくなったりするなど今回のプロジェクトのグループワークを通して、グループ全員が同じ方向に向かすこととメンバーを説得することはとても大変だと感じました。
J	グループワークは意外と大変でしたが、自分なりに積極的に意見を出して貢献できたと思いました。

### 3.2.2 高度思考力

めやすで示された高度思考力は、情報処理、客観的説明、問題解決という三つの方面における力を指す（當作、中野 2013:29）。表7のアンケート結果と表8に示す学生の感想より、今回のプロジェクトを通して、学生が試行錯誤をしながらも、情報処理、客観的説明、問題解決の全てにおいて高度思考力が向上したととらえていることがわかる。

表7. 高度思考力の向上について

項目	平均	5	4	3	2	1
収集した資料、情報を組織し、説明する能力（プレゼンテーション能力）が向上した。	4.46	6 (46.2%)	7 (53.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
課題発見と解決能力の向上に役立った。	4.54	8 (61.5%)	4 (30.8%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
グループワークは多角的に物事（問題）を洞察する視野を身に着けるのに役立った。	4.92	12 (92.3%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平均	4.64					

表 8. 高度思考力に関する感想

学生	内容
D	実際にプランを立ててみてプランを作る事の難しさも体験しました。
E	PPTの発表では、相手に私たちの説明がいかに分かりやすく伝えるか努力したがなかなかうまく伝わらず、皆の前でプロジェクトを発表することがいかに難しく大変かということが実感できました。
F	主観的ではなく客観的に物事を見て判断するという事の難しさと重要さを知ることができた。
G	12月のプレゼンテーションはスライドの構成とどこを1番強調して言いたいかを考えることに苦労しました。

2023年度においても、最終成果発表まで段階的に学生の主体性が増していくようにプレゼンテーションの機会を設定していきたい。また、学生が客観的そして多角的に物事を考察する力を養うため、毎回のプレゼンテーションにおいて評価シートなどを利用し、互いにフィードバックを提供し、自分たちのグループワークやプレゼンテーションを他者の視点から見直す機会を引き続き設けていきたい。

### 3.2.3 情報活用力

本稿では、めやすで示された情報活用力の中でも「情報リテラシー」の向上についてアンケートを行った。めやすにおいて情報リテラシーは、「必要な知識や情報を特定し、情報源にアクセスしたりして、収集した情報を評価したり、整理したりすることができる」能力（當作、中野 2013:29）とされており、表9で示すアンケート結果によると、学生は情報リテラシーが向上したととらえていることがわかる。

プロジェクトを行う過程において、学生は図書館の検索システムやインターネットを使用し、必要な情報や資料を収集だけでなく、グループでアンケートを作成し、メールや各種SNSなどを適切なツールを使用して配信し、情報収集を行い、その情報の評価と整理を行った上で、最終成果物やプレゼンテーションの作成に活用していた。しかし、学生がグループで作成したアンケートの一部設問内容が、必要な情報は何かを熟考して見極めた上で設定されているとは言い難い状況があったため、今後、学生が作成した設問の内容について、より丁寧にサポートを行う必要がある。

表 9. 情報リテラシーの向上について

項目	平均	5	4	3	2	1
情報、資料を収集する能力が向上した。	4.46	6 (46.2%)	7 (53.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)



### 3.3 社会文化知識

社会文化知識についてであるが、表10のアンケート結果から学生は中国語圏旅行者を対象とした旅行プランの作成において、日中社会文化に関する知識を活用することができたととらえていることがわかる。日本人旅行者向けプランには北野や中華街など神戸の有する異国情緒が感じられるコンテンツを組み込んだ一方、インバウンド旅行者向けプランには、温泉・銭湯、和食、神社、民宿そしてスキーなど、和の要素や日本の四季を感じられるアクティビティが多く取り入れられた。このように、国内旅行者とインバウンド旅行者で、消費動向や社会文化に起因するニーズの違いなどの調査結果を旅行プラン作成に活かすことができていた。

表 10. 社会文化知識の活用について

項目	平均	5	4	3	2	1
日中社会文化知識及びその異同を成果物の作成に活用できた。	4.46	6 (46.2%)	7 (53.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

### 3.4 その他

まず、授業スケジュールについて、2022年度は12月初めの最終成果発表会から、翌年の1月初めの学部統一卒業研究レポート提出締切までが一か月ほどしかなかった。次年度からは最終成果発表会の日程を1か月早く設定し、レポート作成のために十分な時間を確保していく。

次に、2022年度は基本的に学生自身の希望によるグループ分けとしたが、今後は男女比を考慮した上で、これまであまり関わりのなかった同級生と協働する機会を提供できるよう改善を行う。

三つ目に、今後も本学が位置する神戸を軸にプロジェクトを進めていきたいが、兵庫の中の神戸という位置づけから、一泊二日を全て神戸市内で周遊するのではなく、兵庫を周遊する中で神戸を訪れる旅行者に神戸の魅力を訴求すると考え、一日の旅行プランを作成するように変更を行う。

最後に、2022年度は神戸観光局職員など学外の関係者をゲスト審査員として招き、学生が作成した旅行プランについて評価と講評を依頼した。その結果、表3に示された評価基準のうち、「新規性・独自性」については課題が残ることとなった。各種ガイドブック、ウェブ、SNS等で紹介されている既存の旅行プラン、観光資源とは一線を画す旅行プランを作成できなければ、更なるインバウンド旅行者、特にリピーターの集客にはつながらない。そのために、次年度は学生目線で、神戸の新たな観光資源を発掘、提案する点を更に意識して、プロジェクトを実施していきたい。

## 4. おわりに

本稿では、筆者が2022年度に担当した卒業プロジェクトについて、その実践結果について授業デザインの視点から分析と省察を行った。今回の実践で目指した総合的コミュニケーション能力の中で、協働力、高度思考力、情報リテラシー、社会文化知識の活用においては一定の教育効果が得られたと考える。しかしながら、高度な中国語運用能力の育成、及び学生が作成した旅行プランのオリジナリティなどの面において大きな課題を残すこととなった。本稿の実践は、行動研究のスタートであるため、次年度以降も引き続き授業実践を行い、実践結果の分析と改善を継続していく。

## 注

- 1 後期第7回及び第8回授業は、本学が高大連携を行っている兵庫県立伊川谷高等学校の中国語授業における交流授業に参加した。
- 2 インバウンド旅行者については、コロナウイルス感染拡大防止のための水際対策などで、中国語圏からの旅行者を対象とした調査が困難であったため、2022年度は関西在住の中国語圏出身者を対象に旅行プランを作成することとした。

## 参考文献

- [1] 岩崎邦彦 (2019)、「地域引力を生み出す観光ブランドの教科書」、日本経済新聞出版
- [2] 當作靖彦、中野佳代子 (2013)、外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言、公益財団法人 国際文化フォーラム (TJF)
- [3] 一般財団法人 神戸観光局 (2017)、「国内旅行戦略」<https://kobe-dmo.jp/wp-content/uploads/2021/11/kokunairyokousenryaku.pdf> (閲覧日：2022年4月28日)
- [4] 一般財団法人 神戸観光局 (2017)、「インバウンド戦略」<https://kobe-dmo.jp/wp-content/uploads/2021/11/inboundsenryaku.pdf> (閲覧日：2022年4月28日)
- [5] 一般財団法人神戸観光局 (2022)、「With コロナ時代からの滞在型観光の促進事業」<https://kobe-dmo.jp/news/1856/> (閲覧日：2022年2月20日)
- [6] 経済産業省、「社会人基礎力」<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (閲覧日：2023年5月20日)
- [7] 公益社団法人ひょうごツーリズム協会 (2019)、「学生を対象とした観光魅力づくりコンテスト」<https://www.hyogo-tourism.jp/gokoku-hojo/pdf/hyougomiryoku.pdf> (閲覧日：2022年2月10日)
- [8] 公益社団法人ひょうご観光本部 (2020年)、「ひょうごツーリズム戦略 2020年～2022年度」[https://web.pref.hyogo.lg.jp/interaction/cate3\\_541.html](https://web.pref.hyogo.lg.jp/interaction/cate3_541.html) (閲覧日：2022年4月28日)
- [9] 文部科学省 中央教育審議会 (2012)、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (閲覧日：2023年4月10日)
- [10] 文部科学省 中央教育審議会 (2014)、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～ (答申)」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm) (閲覧日：2023年4月10日)

## 謝辞

本稿の卒業プロジェクトを実践するにあたり、学生への講演、最終成果物の審査・講評などにおいて、神戸観光局観光部部長 河上真吾氏、チャイナエアライン大阪支店長 蕭国智氏、台北駐大阪経済文化弁事所文教課長 林育柔氏の多大なる協力を賜った。ここに感謝の意を表したい。